
匂いおこすは梅の花・

芳雪うめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

匂いおこすは梅の花・

【Nコード】

N 6 4 4 1 K

【作者名】

芳雪うめ

【あらすじ】

江戸は神田の長屋に暮らす、侍の清次郎と棒手振りの喜市の話、第三弾です。

武家の長男である清次郎が、貧乏長屋で浪人同然の暮らしをしている理由とは・・・
すっかりと相棒になった、生まれも育ちも違う町人の喜市との出会いの話。

その一（前書き）

シリーズものの第三弾ですが、こちら単品でもお楽しみいただけるように書いて行きます。

よろしかったらシリーズ前回の「蠟梅」「雪解けの足跡」も読んで頂ければ幸いです。

その一

最近、お向かいは楽しそうである。

神田の長屋暮らしの侍の清次郎が縁あって連れて来た化け狸は、向かいの棒手振りの喜市の元ですっかりこの長屋に慣れ、最近ではその妙に大人びて賢い物言いもあって

「ぼん」

と呼ばれて長屋の皆から可愛がられている。

三月にもなり、だいぶ暖かくなった江戸は、みながどこことなくふわふわとうかれています。穏やかに賑やかで、ものを考えることすら億劫になるような雰囲気だった。

昼間、向かいから聞こえる笑い声を子守歌にして夢に入る少し前、朧気な意識の中で故郷は未だ寒かろうなあ、と寒風に揺れる木々を頭に浮かべたが、その寒々しい景色に自然と身震いしてしまい、すぐにかき消して寝返りをうった。

古い布団は、もうそろそろ打ち直してもらわなくては畳の縁の出っ張りが寝心地を悪くするくらいに薄っぺらかったが、長屋暮らしの清次郎にはその金を工面するのにも苦勞がいった。

狩野清次郎。

この名前には大分慣れたものである。

不意に名を問われても、隔てるものが無くすらと出てくる。

狩野のご先祖の功名のおかげで、狩野家は末代まで扶持の継承が保証された御家人の家である。

端から見ればどうみても名家に変わりなく、狩野家の長男である清次郎は読み書きも剣も他より進んでいたので、はじめは親類などに

は随分と躍進の期待を持たれたものだ。世間には扶持をもらつてもほぼ無役の貧乏侍は多く、狩野家も例外に漏れずそうであったのだ。

世間の同じような御家人には、家族全員を食べさせるために商売もどきに手を染める物もいたが、武家にあつて商売の才覚がある者はまれで、多くは逆に借金をこさえるなどして更なる没落を余儀なくされた。

そういう家々は、その名家の威厳を、養子に迎えるという形で他人に銭で売り、食いつないだ。それを買うものの多くは、身分を欲する豪商やその息子、武家の次男などであつた。

巷ではそれを御家人株と言ひ、狩野家も実のところその御家人株を売つた家の一つであつた。

買つたのは白河藩で祐筆を勤めていた柘植正道という武士であつた。狩野家の長男となる以前、清次郎はその柘植家の長男であつた。

長男でありながら付けられた清次郎という名前には、清次郎もまた祐筆として役を得られるよう、でしゃばらず清く生きよという意味が込められていた。

その名の通り、若くして温厚で誠実な清次郎はまた文武共に秀で、周りからもその将来の如何に有望かをうたわれていた。

清次郎に母はなく、父と後妻、そしてその息子である腹違いの弟と何人かの中間や下女などとともに、何不自由ない暮らしをしていた。

しかし、17歳の春のことである。

突然、家から出ることを禁じられた。しかも父から直々に命じられたので、わけの分からぬままであれ命にしたがつたが、部屋に下男下女すら寄せ付けぬ徹底ぶりは、奇妙であつた。

日がな一日、道場にも出られない清次郎は本を読むかひっそりと畳の上で徒手を行うかで時をつぶしてはいたものの、頭の中は常に得体の知れない不安に駆られていた。

そうして一月ばかりしたある夜、代々柘植家に使えているもつとも信頼ある中間の田宮と言う男が、目に涙を溜めて清次郎の部屋を訪ねた。

手には振り分け行李と、決して良いものとは言えない着物がある。田宮はそれらを横に置くと、床に頭を擦り付けんばかりに土下座をした。

「清次郎様、どうぞお許しくださいませ。柘植家の御為にございます」

この日この時より、清次郎は狩野清次郎となつたのだ。

田宮が言うには、こうであった。

義理の母である“お圭”の父である白河藩御家老の秋山の孫の中で、男子の孫は清次郎の義弟の虎之介とその三つ上の従兄のみであった。秋山には男子が無く、その従兄を養子にするつもりであったが、その従兄がつい先日病に倒れあっさりと逝ってしまったのだ。

そこで虎之介に白羽の矢が立ってしまった。虎之介は幸いにも次男であったので、秋山は喪が明けるのを心待ちにしていると言う。しかし、お圭が嫁いで十年、虎之介は念願かなって漸くできた子であった。お百度も踏み、まじないもし、いい祈禱師がいると聞けば呼びつけて困うくらいに執心した末に出来た子である。手放せばいくら子と言えど、家老のご子息となるわけであり、そうそう会えるわけではなくなる。

ましてや、隠してはあったがお圭は秋山の妾腹の子であった。そのような間柄の孫を、秋山の妻がどのように扱うのかと思うと、

お主は心が休まらなかった。

そして、わが子可愛さに優しい継母だったはずのお主は一計を巡らせた。

夫である正道に泣きつき、虎之介を養子にやらぬよう懇願した。正道も若く美しい妻が死ぬの生きるのと泣き叫ぶのを不憫に思ったのと、可愛いわが子のため、それを受け入れたのだった。その後、苦心した正道の出した策は、虎之介に家督を継がせることであった。

しかし、家督を継ぐのは基本的には長男である。

そのために長男である清次郎は

「俺は死んだと言うことにされたのか」

行き着いた答えにそう呟くと、田宮は

「滅相もない」

と涙と鼻水で滅茶苦茶になった顔を袖で拭いながら首を振った。

自分の不憫さを悲しんでくれている田宮の心遣いはひしひしと感じたが、何が滅相もないのだ、と清次郎は心の内で笑っていた。長男でなくなることはとんだ滅相ではないか。

「清次郎様はご病気にございまして、御家を継ぐには体に不自由と
言うことになり申した。」

そうして、医者が多い江戸にいる親族の養子となり、ご養生を尽くされる手はずに。

しかし、清次郎様は秀でたお方でございます。江戸に置かれまして
も、ご活躍なさることと御館様も仰っております。」

そう言い、再び頭を床に擦り付ける田宮に、清次郎は半ば哀れみを持って目を見ると、身の回りのものは全て売り払うように言いつけ、わずかな荷物を纏めた。

その二

植物さえも息を潜めて凍りつくような夜中、まるで逃げるように門をくぐった。

もうおそろく、二度と戻ることはないだろう出立に、父上も母上も終ぞ会いに来る事はなく、降り注ぐ雪のような白い梅の花だけが、吹きぬける風でその枝を振って見せていた。旅の伴を装った中間に連れられ、江戸の狩野家へと向かう足取りを何歩かとつた後

「江戸でのご活躍、ですか」

と呟きただ一度だけ、清次郎は振り返った。

どんよりと湿った曇り空を引つさげ山に囲まれた国から、いくつもの関所を越えてやってきたのは、それとは全く反対のからからと乾いた江戸の町だった。昨日剃った髭の後が、ひりひりと痛む。

感じたのはそれだけではない。郷とは違う、風土に似てあつけられんとした江戸の人々の空気に清次郎は気おされた。町人たちは武士などにわき目も振らず裸足に尻からげでそこらじゅうを駆けている。それに驚くのもつかの間、行き着いたまるで貉に化かされたかと思えるほどに同じ白壁の群れの中、江戸は市ヶ谷にその屋敷はあつた。

並びの家々に引けをとらぬ立派な門構えの大きな屋敷であつたが、しかしどうもひっそりとしている。

中間は門前で待つ様に清次郎に言くと、家の者に声を掛けるでも無く、勝手に脇の小さな木戸から中に入ってしまった。

風に肌を任せてみれば、もうそれはすっかり春めいていて、ついこの間まで感じていた故郷の寒風と梅の香りを思うと何だかすっぱりと記憶が抜け落ちてしまった様な感覚だった。

程なくして中間は、白髪交じりの四十歳ほどの女を連れて出て来た。浅黒くかさついた肌を張り付け、落ち窪んだ目の女は、どこかおどおどとして落ち着かない様子でいる。

「此の方は狩野様の御新造さまにてございます。お後のことは此方の御方にお聞きください」

中間はさした感情もなくそう述べると、深々と頭を下げ、一度も振り返る事なく来た道に戻って行った。

途端に、寂しい。郷にいた頃も、道中も大して言葉を交わした思い出さえない中間であつたが、今となつてはもはや故郷を思い出す物は、持参した筆だけであつた。

着物や下着は、せめてもの心尽くしのつもりか、江戸趣味の真新しいものが幾つか揃えて入っていたし、手紙や本などは荷造りの際に全て除けてしまった。

もう、戻ることはないこの地を思い返すことは自分の為にならぬと思つたし、それならばいらぬものばかりであるから、結果、荷造りとは名ばかりの大そうじに変わりなかつた。

しかしただ唯一、手になじんで便利だつた筆だけを箱に入れ、行吏の中に大事にしたのだ。

寂寥感に苛まれ突つ立つ清次郎に丁寧な頭を下げた御新造は、頬を緩ませることもなく

「お待ち申しておりました。狩野の妻にございます」

と無愛想に言つと、脇の木戸へと案内した。

まだ昼で、ましてや御新造がわざわざ迎えて下さつたのに、横の立派な門は手付かずであつたので、清次郎は不思議で

「こちらの門は使わないのですかと尋ねた。」

御新造はごまかす様に

「いえいえ」

と言いながらようやく笑うと、中へ入るように再び促す。変だなあ
と思いながら、促されるままに足を踏み入れると、御新造は直ぐに
今入った木戸を閉めた。

そしてくるりと清次郎に向き直ると、困った様な顔を作り

「おりませんもので」

とだけ一言口にし、そそくさと屋敷へと向かった。

主人と子供は出かけてまだ戻らぬと言うので、御新造はまた直々に
屋敷の部屋部屋を案内してくれた。

そうして気付いた。

心遣いでご新造が自ら案内してくれている訳ではない。御新造しか
案内する者がいないのだ。

それを表すように、作りの立派な門や塀とは打って変わって家の中
はきわめて粗末であった。いや、欄間や部屋数などは手の大層だ
んだ、どうして立派な武家屋敷であった。

しかしながら肝心の生活道具がないのだ。

隅にある年季の入った文机に出しっぱなしになっていた硯は、端が
大きく欠けていたし、筆筒もなければ、畳は所々擦り切れていると
いう有様だった。

拳句使っていないとみえる部屋の天井の隅には蜘蛛が悠々と大きな
巣をこさえ、その主さえ干からび死んで落ちていた。

清次郎は十分に納得が行った。

自分は養子に入つたのではない、自分は實際はこれからこの家の主になるのだ。おそらく父は、養子の名目で御家人株としてこの家自体を買つたのだとわかつた。

多少名の通る家ならば、ひどく金に困窮すれど、清次郎の活躍しだいでお引き立てもあるかも知れぬと一縷の望みを持つたのだらう。そして、扶持ではままならぬ家、これが父が自分に出せる精一杯の餞別であつたのだと思うと、恨みなどをはるか通り越してただただ悲しい気持ちで一杯であつた。

御新造が、息子になろうという清次郎にどこかおどおどしているのもおそらくそのせいなのだらう。一家がそういう気持ちで自分を迎えるのかと思うと、陰鬱な気持ちがいじくりと満ちていった。

案内が一通り終わると、清次郎には恐らく一番良いと思われる部屋があてがわれた。

荷物を全てその部屋に入れると御新造は、主人と子供が戻つたら来ると言つて、そそくさと行つてしまつた。

その二（後書き）

4月2日訂正：白河藩だということをすっかり忘れ、文中で海沿いの藩などを書いてしまいました。正しくは現在の福島県白河市です
ので、まったく海沿いではありません、申し訳ありませんでした。

その三

先ほどまでの部屋とは違い、与えられた部屋は畳も比較的綺麗で文机もまだ新しく、がらんとした部屋の真ん中に腰を下ろすと、自然と清次郎の目頭は熱を持ち始めた。そういえば、幼い頃からともに通った剣道場の仲間にすら挨拶もしていないことに、今更気付いたのだ。

彼らが、清次郎が江戸で療養していることを知って、もしわづかばかりでも心を痛めていたとしたらと思うと、苦々しいものが一気に胸中を駆け抜けた。

江戸までの道中はそんなことを考えたことはなく、家族のことやこれからのことをぼつぽつと考えていた。そしてその他の大半の時は何も考えずただ歩いていた。考えることは億劫であつたし、どこか漠然と恐ろしかったからだつた。

しばらくして、障子向こうの御新造の声で意識を戻した。

旅の疲れは清次郎に泣くことを許さず、どうやらすっかりうたた寝をしていたらしい。

清次郎は慌てて起き上がり襟を直すと、主人を迎えに出ようと立ち上がった。

すると障子が俄かに音を立てて開けられ、まだ十ばかりであろう男子とその父親であろうこの館の主人が揃って手を突き頭を下げた。

「ようこそお出でくださいました清次郎様、お出迎えできず誠に申し訳ございません」

主人の余りに恭しい様子に一瞬清次郎は呆気にとられたが、すぐさまその向かいにきちんと座り直した。そうして手を着き頭を深々と下げると

「お父上様、どうぞお顔を上げて下さいませ。今日より私は父上の子にございます。どうぞ、厳しくご指導下さいませ」

と、負けない恭しさで口にした。

それでもなおとんでもないと頭を下げる義父に、清次郎が坐したままにじり寄って「おやめください」と求めるとようやく頭を上げたが、その顔つきには父親らしい威厳のかけらもなかった。

ある程度予想はできていた通りの事に、清次郎は驚くこともなかったが、それでも落胆は心に刺さり辛かった。

翌日から、一家の様子は変わらず居心地はわるかったが、しばらくして旅の疲れもいえた頃、義父は前もって口利きをしていてくれたらしい奉行所の事務方の仕事を手配してくれた。それだけが一縷の望みのように思えて、清次郎は嬉々として義父に感謝を述べた。

狩野家の貧困の原因は義父にあった。

義父は体が弱く、働きに出ることが困難であつたようで、四日とあけずに医者に通い、その医者代と薬代はばかにならず、駕籠も使えぬほどだった。自然と御家人の間で狩野家の御家人の間での肩身は狭くなり、それが寄り一層この家族の雰囲気重くしているように思えた。

清次郎は、自分がこの家のために働くことができれば、そのうち家族としてこの家に溶け込めるのではないのかと、密かな期待を抱いていたのだ。

清次郎はその誠実さゆえに事務方の仕事は適任だったようで、毎日張り切って仕事に出かけた。いつかは、と思えば、どんな仕事も楽しかった。里のことも、段々と思ひ返すことが自然と少なくなっていく。

思い出す暇もないほど働いた。

だが、その期待と努力が実を成すことはなく、扶持相応の役を持つて家の再興に碎身する清次郎に家族は日々一層諂い、余所余所しくなるばかりであったのだ。

中でも、十二になる義弟の様子はことさらに痛々しい。

清次郎は子供が好きであつたので、ことあるごとに土産を買ったり、遊びに誘ったりしたのだが、弟はそれらを全て丁重に断る。それは兄に敬意を抱いてのことではなく、丁重とは形ばかりの、よそよそしさであつた。

ある日

「突然兄ができては、戸惑うのも無理はないな」

縁側で転寝している義弟を眺めつつ、いたわりからつい口から出た言葉に義弟は突然目蓋を上げると、清次郎をきつと睨み、そのまま飛び起きるようにしてどこかに行ってしまった。皮肉なことに、初めて義弟の感情と言うものが見て取れたのはそれが最初だった。

清次郎はその時、義弟が自分を避ける理由がまさしくそれだと気づいた。自分がいなければ、義弟は長男としてこの家を継ぐことができた。父母のため、何よりお家のために尽くすことができた。武家の長男として、男子が抱く志は、良くわかる。

しかし、実の父がそれを売り払い、赤の他人がその位置にちゃっかりと居座っているのだ。

父への失望と、己の未来の消失への絶望の程は計り知れない。それは、清次郎自身が一番良くわかつていた。

わかつていたからこそ、それ以上声を掛けることははばかるしかなかったのだ。

清次郎はその後、来日も来る日もひたすら働いた。田舎出で、実直

に執務をこなし穏やかで優しい新入りは、荒々しい同心などにも弟のように可愛がられた。

彼らに夕餉に誘われることもあったが、清次郎はそれに応じることではなく、いつもまっすぐに家に戻った。

しかし急いで帰ったところで家には話す者もなく、漸く雇った中間も、渡り中間に過ぎないので、余計なことは一切話さず、日の勤めが終わればそそくさと帰ってしまう。

相変わらず義弟は自分を避けていたし、長男とはまさしく名ばかりで、まるで居候の身の上であつた。油代を節約するために夜更かしもせず、ただ静かに一人で朝までの時を過ごしていた。

早々に寝入るせいで自然と目覚めも早く、仕事に出るまでは時間があり、それはすべて庭の掃除や水汲みに費やした。

うつすらと日の射す白んだ空に飛ぶ雁の群れを眺める時が、心を和ませることができる数少ない時間であつた。

その四

すべてを割り切ってしまうえば、日々の暮らしはいとも簡単なことではあった。

自分が必要とする職場はあるし、友と呼べる者もないわけではない。狩野家を自分のものとし、ただ淡々と家族を養うことに勤めれば、何十年先の安泰すら見える。

しかし、自分の為に生きようと思うときに必ず、義弟の悲しそうに睨む目が浮かぶのだ。その度に己が心の出口から踵を返して、また元の場所で悩み続ける。

必要とされるほどに、自分の居場所にいるはずだった義弟への思いがやまない。友と笑いあうたび、長男を失職した恥ずかしさに外を堂々で行けぬ義弟に今度は清次郎の方が顔を向けられなくなっていた。

そうして、三年の年月が流れた。

巡ってきたのは、梅の蕾がほころび始めようかという季節である。義弟の元服も控え、にわかには家の中は慌しかった。

清次郎と家族は、あれから必要以上に親しむことはなかったものの、丁度良い同居の距離を心得、それなりに不自由を感じずに暮らしていた。

父親の具合も、医者を変え、また清次郎のおかげで心に追うものがなくなつたせいか、依然よりもずっと良く、このままこれが続くものと家中の誰もが疑わずにいた。

ところがある日、清次郎は仕事に出た後、まだ日の高いうちに屋敷へと戻ってきた。家のものが血相を変えて迎えたのは、それが戸板に乘せられての帰宅だったからだ。

聞けば突然仕事場で倒れたという。直ぐに医者と呼ばうと言ったが、清次郎は頑なに「帰る」と言い張ったらしい。

父親の医者代葉代で苦勞をしていることは、皆知るところであつたから、清次郎が自分までもがそうなるのかと心配をしているであろうこともきちんとかつていて、備えていた気付けの薬を飲ませると、気心の知れた同僚が運んできてくれたのだ。

実のところ、その同僚が医者代を持つといったのだが、律儀な清次郎は眉間に苦しそうなしわを寄せつつも丁重に断った。

狩野の両親はともにすっかり狼狽して、息子に急ぎ行き着けの医者と呼びに行かせた。

さすがの清次郎も、父親の心遣いにはおとなしく従い、部屋に寝かされるとおとなしく医者を待った。

義弟に伴われた医者は来るなり息も絶え絶え清次郎を診たが、ろくに診もせずにくさま首を横に振る。

「これはいかん」

医師は家族を外に出し、弟子とともにじっくりと清次郎を診察した。しばらくして出て来たのを義父がさがりつくように聞けば、心の臓が相当に悪くなっているという。

原因は、三年に渡る慣れぬ江戸暮らしのせいらしい。所謂、江戸病だと。

江戸病と言われるものがあるのは知っていたが、心の臓迄悪くするとはみな初耳であつた。

家族は思い悩んだ。一番の薬は里に返すことであるが、それは出来ない。

さりとてここに置いたところで、以前よりぐつと安くなったとは言え父親の医者代で精一杯で、清次郎のそれまでは首が回らない。

どうしたものかと三人が顔を突き合わせていると、そこに医者が口を挟んだ。

「どうだろう、私の元に預けてみては。どの道ここで寝ているだけではどうにもならんが、私の元であればいつでも診てやれる。私も一度江戸病と言うものを、どう治すべきかじっくりと向き合いたいのだ。ゆえに代金は戴かぬ」

突然の申し出に家族は困惑した。有り難くはあるが、言わば実験に使われるのではという心配が心を巡る。養子とは言え、清次郎は柘植家お預かりした立場であるのだ。

返事を言い淀む義父に向かい、医者はすべてを見越したように付け加えた。

「何より、今まで清次郎殿には色々と心遣いを頂いているのでね、少しはお返し致したいのだ。それと、私がこの件、諸処書き付けを致すので、申し立てをなさって弟君を跡継ぎに致すとよからう。仕事をするにはもとなない年頃かも知れぬが、清次郎殿の弟君ともあれば、みな良くしてくれよう。まずは清次郎殿に書状を書いてもらえばよい。」

義父は、自分を診てくれているから、と清次郎が折りにつけて挨拶や贈り物をしているのを知っていたが、医者 of このとんとん拍子の寛大すぎる申し出にはさすがに疑問を抱いた。

しかし、医者 of 提案の他に良い考えがあるわけではない。もし何か起こっても、医者に預けて養生と治療の限りを尽くした、となればご実家も咎めはすまい。打算して、しぶしぶ義父が首を縦に振ると

「清次郎殿は納得なさるであらうか」とだけ聞いた。

医者は長い髭を指でひねりながら

「それなら心配いらぬ。先ほどすべて説明いたした。」
と穏やかに笑みさえ浮かべてに答えた。

そうしてまるで夜逃げの如くその日のうちに清次郎のすべての荷物はまとめられた。

と言つても、三年前、ここに来た時の荷物そのままである。

白河より共にした今も愛用の筆は、時を経たのも感じさせぬほどに美しく保たれていた。

日も暮れて人の目が少なくなった頃、中間に背負われた清次郎は義父とともに医者の元へと向かった。

背に揺られた清次郎が空を見上げればそこにはぼつかりと月が浮かび、まるで洞穴の出口のように煌々と光る。わざわざそれを横切るように、雁が飛んでいった。

冷え始めた空気に、梅の香が遠慮がちに載れば、頭をよぎるのは三年前にただ一度振り返った家の風景であつた。

そうしてもう夜も五つになるうという時分に、やっと医者の持ち物である神田は亀井町にある長屋に着くと、義父は医者の元へと向かい、中間は部屋の中に敷かれた布団に清次郎を下ろして、荷物を置いて火鉢に火をおこすと、とそそくさと行つてしまった。

義父が入れ替わりに来た父は、申し訳ございませんご養生なさってくださいとだけ言つて一礼し、余りにもあつけなく部屋を出た。

目も合わせぬ父親の態度は決して情のなさを表しているのではなく、自分の不甲斐なさを責めているであらう。清次郎は少なくともそう理解することに務めていた。

家を出る時、義弟が盛んに「ついていく」と言つたが、もう遅いか

らと清次郎は丁重に申し出を断った。どんな理由であれ、少し嬉しかった。

しかしこの長屋の部屋は、今まで過ごした中で一番酷い部屋である。江戸へ来る道中の旅籠にもひどいものはあったが、これはそれと同等か、ともすればそれ以下だ。

破れた障子の隙間からはぴゅうぴゅう風が入り込み、壁は煤だらけであった。

しげしげと部屋の弱点を探っている最中、突然腰高障子が開く。

「やあ、無事に着いたようだね」

昼に清次郎を診た医者である。彼は口髭をひねりつつ、話を続けた。

「もう、皆行ったよ。」

それを聞くなり清次郎は

「いやあ、はは。どうにも悪い商売は出来そうにないなあ。」

と笑いながら上半身を起こすと、寝たきりで凝った肩に手を当て、首を回してこきこきと鳴らした。

ばかに朗らかなその様子を見て、医者は心配そうに顔をしかめる。

「良かったのか。大変になるのは清次郎殿だ。御主が立派に働いていればあの家族は何の心配もないのだぞ。」

清次郎の病気は、実のところ全くの嘘であった。

朝早く起き、夜は早く寝、食べ物の好き嫌いもなく、毎日少し離れた仕事場まで歩いていく。体の悪くなりようもない清次郎は健康そのものであったのだ。

「なに、弟には算術も読み書きもしっかりと教えましたし、私の仕事のことも話してあります。直ぐに慣れましょう。もしかしたら、私よりも要領が良いかも知れない。」

そついうと清次郎はまた満足そうに笑った。

医者は岸本と言ったが、岸本は清次郎の人の善さに思わず呆れて笑った。

今から二月ほど前、年の瀬で診療が終わろうかという頃に、清次郎は岸本の診療所を訪ねてきた。

年の明けるまで診療所を閉めるつもりであつたので、薬を余分に貰いにでも来たのかと特に不思議に思うわけでもなく、部屋へとあげた。

清次郎は出された座布団に遠慮がちに座ると、どこかそわそわと落ちつかない様子で、岸本は清次郎の父に処方する薬を探す手を休め、向かいの座布団に座った。

「どうかなさつたのか、何だか落ち着かないようだが」

岸本は、狩野家の事情も十分知っていたので、さては年始の入用で薬代が無いのではと察した。

「いえ」と何かを言いよどむ清次郎を横目に、岸本は紙に包まれた薬を引き出しから取り出し

「もう勘定を締めてしまったので、御代は来年お願いしたい」といい、それを差し出した。

すると清次郎はきよとした顔をして薬を受け取った。

「はあ、父の薬はもう切れていましたでしょうか」

清次郎がへんなことを言うので、岸本もきよとした顔で首をかしげる。

清次郎は何かに気づいた様子を見せて、慌てて薬を岸本の前へと差し戻した。

「今日伺つたのは、薬を受け取りに来たわけではございませんで、紛らわしいことをいたしました。」

岸本は、先ほどの心遣いが清次郎に悟られたかという不安がよぎったが、幸い真面目一辺倒の清次郎には察せられることが無かったよ

うで、ひとまず胸をなでおろした。

「では、一体」

岸本が聞くと、清次郎はうなづき観念して話を始めた。

その五

清次郎の話はこうであつた。

年が明けてしばらくすると、弟の元服の儀があり、それを機に自分は家督を弟に譲りたいという。

そのためにはどうか自分の診察をして、適当に働けぬ病であると診断してはくれぬかと。

その後は、町に長屋を借りる算段もしているので、そこで細々仕事をするというのだ。

岸本はもちろん清次郎が養子であることも知っていたので、彼の申し出の理由も十分理解できた。

しかし、清次郎が根っからの武家の坊ちやまであることはわかつていたから、そう簡単にはいかぬぞ、と何度も説いた。暮らしていけるはずが無いのだ。

けれども一向に清次郎の気持ちは折れず、それどころか今まで見せたことのないような眉間のしわを寄せ、益々意地になって意思を突き通す一方だつた。

半刻ほどにも渡つた問答の後、いよいよ根負けした岸本は渋々承知するしかなく、ようやく清次郎は元の穏やかな顔に戻つた。

「そのかわり」

岸本は話の最後に付け加えた。承知してもらえんなら何か条件を付けられても飲む覚悟をしていた清次郎は、姿勢を正して岸本を見据える。

「長屋はどうか私のところに来て頂けないか」

二つの目が驚いたように目を見開くのを見て、岸本は笑つた。

「何も一緒に住もつてんじゃない。私の持っている長屋だよ。む、ただの医者か長屋を、などと思つてらっしゃるか」

岸本がからかうように言うと、清次郎はぶんぶんと首を振って答えた。

「いえ、しかし、もう決めてしまひまして。」

遠慮がちに答える清次郎に岸本は続けて言う。

「いえね、実は私、元は旗本の次男でしてね。継ぐ職も無いので道楽のつもりで医学を学んで、餞別に長屋を買い与えてもらつたんですよ。」

それでね、何かのご縁だ。もし貴方がよろしければ、ぜひとも用心棒としていて頂きたい。

最近はどこも物騒でね。用心棒がいるとなれば、頭を抱えずとも長屋も借り手が直ぐにつくだらうからね」

本の言い分がただのこじつけの理由にすぎず、自分を思つてのことだというのが清次郎には十分にわかつた。

用心棒、という肩書きを用いたのも、武士としての面目を立てるためだ。

清次郎はしばらく押し黙り、その後ゆっくりと口を開いた。

「岸本殿。貴方のお心遣いはありがたいが、それに甘えるほどのことを私はしておりません。」

丁寧に断る清次郎を前に、岸本はひげをひねりつつ少し悩んだ。外ではさわさわと風に乗って枯葉が舞い上がる音がする。

「私はね、医者が出す物は怪我や病だけではないと思つのだ。清次郎殿、あなたはもう少し、ご自分を労わるべきだ。」

そうして自分の胸の中心を人差し指でとんとん、と指し示すと

「きちんと食えど、働けど、寝れども、それでも笑えなければね、必ず患う所があるんですよ」

言われて清次郎は気づいた。記憶を辿れど、声を出して笑つたのは

いつの事だったろうか、思い当たらない。

わずかにちらつくのは、里にいた頃の友人達のいる風景だった。

来る日も来る日も、張り付けたように柔らかな微笑を湛えた。穏やかに、誠実に。

そんな日々疑問を覚えることさえなかった。

正座したまま、握り締めた手をひざに置き黙る清次郎に、岸本は続けて言う。

「清次郎殿、この部屋に入った時、何か気づけなかったろうか。」
不意の質問に、清次郎は眉間に緩く皺を刻んで考える。が、一向に答えは思い当たらない。

つい十日ほど前に来た時と、何ら変わりはないのだ。

そんな清次郎の様子を見つめると、岸本は棚の横にある布袋を取り出し、中を広げてみせた。

そこにはからからに茶色く干からびた何かの葉が、ぎっしりと詰まっている。清次郎は岸本の意図がつかめず

「はあ、なんでしょう」

と聞いたが、岸本は何か納得したように、口をへ字に曲げて一つ頷いた。

「これはね、？ どくだみ だよ。」

取り寄せたんですがね、知り合いの医者も欲しいというので、後もう三袋ほどあるんだがね。

しかしこれがいかにせん凄い匂いでね。さっき弟子が耐え切れず逃げ帰ったほどだよ。」

言われて清次郎は驚いた。全く気づかなかったのである。

半ば信じられずに放心状態の清次郎を前に、岸本は袋を元の場所に丁寧に戻すと、言った。

「実は先日、貴方が御用ついでに寄って頂いた折に下さった魚がで

すね、腐っておつてね。

匂いがね、こう、凄かったんでね。

几帳面な貴方様のことでですから、よもやうつかりはあるまいと。それならばもしやと思つてね。しかしまあ、料理は貴方が作るわけでもなし、問題なかつたと、年明けのお父上の診察の際にでも申し上げようかと。」

そこまで話すと岸本は本当に申し訳なさそうに、すまない、と言口にした。

清次郎はそれに、いや、とわずかに言葉を返すと、いつから匂いがわからなくなつたのだらうと記憶を右往左往した。

岸本は、清次郎殿、とそれを引き止めるように穏やかに呼びかける。「肝心なのは匂いがわからないことではない。匂いがしないことに気づかなかつたことですよ。」

自分をなだめる穏やかな笑みを受け止めたものの、清次郎は急に自分の体が恐ろしくなつた。ものに匂いがあるということですら、忘れていたように思えた。

そんな大事なことにすら気づかぬ程に、自分の周りを安穩に運ばせることに必死であつたのか。そんなつもりは、慣れた今では毛頭なかつた。

「まあ、そんなわけだから。知らない人の中に行くよりは、幾分かこの方が良いでしょう。」

何かあれば、私も直ぐに診に行けすし、おそらくお父上も心配なからう。」

頷きながら言う岸本に言うでもなく、清次郎は僅かな悲しさを以つて呟いて見せた。

「父上は、かような心配なさりましょうか。」

養子に入り今まで他人行儀な氣遣いはあれど、情のこもつた心配なとは片手で足りるほどにしかされたことが無いように思う。

岸本は曇る清次郎の顔を眺めながら、ふと顔を引き締めた。

「いや、ここに来るたびに、清次郎殿が新調してくれた服だとか、弟が清次郎殿に憧れて勉学に励んでいるだとか、まあ、何かにつけて清次郎殿が、と嬉しそうに言っていたよ。

私が褒めれば、ためらうことなく「そうだろうそうだろう」などと申されてね。」

正直に吐けば、嬉しかった。

想像もしていないことに、ぎゅっと詰めていた肩がゆっくりとほどけ落ちるのを感じた。

わざわざ岸本にまで言つてのけたそれが心からの言葉なのか、見栄なのかを見極めるのが容易なほど、三年という距離を置けど共に過ごした月日は充分義父を理解させるものであった。

加えて、義弟の心が少しでもこちらに向いていたことを思うと、心の底から安堵した。

うつむけば思わず涙すらこぼれそうで、清次郎ははっとして顔を上げる。

清次郎の心のうちは、今の言葉ですっかりと不動のものとなった。

「是非に、お世話になりとうございます」

しっかりと放たれた言葉に、今度は岸本の二つの目が見開かれた。

おそらく岸本は、最後の引止めのつもりで、義父の言葉を引用したのかもしれない。

しかし清次郎には、最後の一押しとなったのだ。そんな家族のたをを思えばこそ、そうしたいと思ったのだ。

心配はかけるやもしらねど、この選択が間違っているとは思えど。変える気になど到底なれなかった。

このまま病を装ってはなれようと、狩野の家に戻ろうと、一家が自

分に氣を使つて生きていくことは分かっていたし、何より自分の弟には与えられるはずであつた将来への路を、歩んで欲しかったのだ。自分と同じ思ひはして欲しくなかつた。

岸本はもう十分にこんががつたひげを再びひねり倒し、むう、と唸るとやがて観念したように

「あい分かり申した。こちらこそ宜しく願います」と一礼した。

その六

そうした一件の末、岸本のお陰で全てが首尾よく運び今日の日を迎え、清次郎は岸本の用意した部屋でこれからを過ごすこととなった。翌朝いつものように早々に起きると、故郷からずっと傍らに置いている筆を取り出し、町奉行に向け今回の事の顛末と弟に仕事の跡目を任せたい旨を書き、近所の探索がてらに診療所まで自ら赴き岸本に託した。

よく晴れた日だった。

少し離れた長屋へ帰るのに、清次郎は気分転換に遠回りをしようと思いついた。

働きづめの毎日では、時分を気にせずぶらつくなど出来ぬことである。

ゆっくりと歩みを進めてわき目を振れば、まだ寒風吹く季節ではあるがちらほらと枯れ草の合間にわずかに青い葉が覗いている。

大川の手前に出ると、まだ蕾もつかぬ桜木の脇でここそこに花をつける梅木に出会った。

その下では、子供らがその鼻を天に向けながら一生懸命匂いを嗅ぎ、何が楽しいのかじゃれあいながらけらけらと笑っている。

頬の緩むような光景に誘われるように清次郎もその木に近づき、そっと幹に触れて見上げてみたが、当然、清次郎に其の柔らかかであるはずの芳香は届かない。

微かに記憶に残っていた郷里の梅の香は直ぐそこにあるようで、しかしはつきりと思い出すきっかけを得ることは出来ず、余計にばやけていくように感じた。

途端に清次郎の胸の奥は、ぎゅっと握りつぶされたようにきしむ。記憶の中の郷里にすら辿り着けず、知る者を頼ってはいけぬ今の状況は、すっぱりと暗い穴に一人取り残されたように不安であった。清次郎の持て余す気持ちとは裏腹に楽しそうに周りを駆けて帰っていく子供たちの声が、どこかとても遠くに聞こえる。

次第に目の前がぐるぐると回る。締め付けられた胸が呼吸を遮るのを喉元で押さえ込み、肩を上げて呼吸を整えた。

耐え切れず幹に寄りかかってしゃがみ、ぐらぐらとする頭で必死に体の軸を保とうと務めた。気づけば先ほどの子供が去ってしまった梅の木の下には、清次郎の他にもう誰もいなかった。

「ああ、運が悪いな。」

呟くとほぼ同時に清次郎の体はぐらりと右に傾いた。

浮き出た根に頭を打ち付ける刹那、地面とは違う少し柔らかな感触が清次郎を受け止める。

「どうしたい、お待さん」

置いていかれた洞穴の底に飲まれていくように意識が遠のく彼方で、春霞のように柔らかく、暖かな声がした。

随分と久し振りに郷里の夢を見た。梅の花はまだ一つも花をつけていなかったが、木の上に積もった雪が月光に照らされて光るさまは満開の梅を思わせた。穏やかな心持の中、吹き込む風に起こされて目を開ければ、まだ見慣れぬ木目の天井が見えた。少しずきりと痛む頭に顔をしかめる。

額に手を当て重い頭を支えるように上半身を起こせば、いつの間にか自分の部屋の布団の上に寝転んでいた。どう思い返しても記憶がないし、これ以上考えると余計に頭が痛みそうなので清次郎は首をぐるりと回して鳴らすと、再び掻い卷きの中へともぐりこんだ。

すると突然、ぱしりと戸が開いた。

清次郎は首だけでそちらを見やると目に入っただのは、年のころは二十かそこら、自分と同じ年頃であるう立ち姿のしなやかな、所謂優男が立っていた。

「ああ、具合はどうだい」

そう言いながら見慣れぬ男が近づく。手には鉄瓶と湯のみ、そして握り飯があった。

「貴方がここまで運んでくれましたか。」

清次郎がゆっくり体を起こそうとすると、そのまま、と男が止めたので言葉に甘えて体の向きを変えるだけに留めた。

男は部屋に上がりこんで清次郎の脇に座ると湯飲みやらを傍らに置いた。

「しかし何もない部屋だねえ。こんなお飾りみてえな火鉢じゃ寒かろうよ。」

そついう男の脇には見慣れぬ大きな火鉢が置いてあり、男は鉄瓶をそこにかけた。

「貴方が持つてきてくれたのか。」

と聞くと男は、へへ、と軽く笑った。

「しかし何故、私の家が分かったのですか。」

「俺は喜市だ。同じ長屋のあんたの向かいに住んでるよ。隣のばあ様から岸本のじいさんのところに薬貰いに行くのを頼まれてね。天気が良いからって回り道して帰ったら、あんたが倒れてたんだよ。」

話しながら男は引っ掛けていた羽織を脱ぐと、清次郎の上にかける。男の着ている着流しは、よく見ると羽黒山の小紋で、どう見積もっても小判一つは下らなさそうな見事なものだった。

「何だによつてみれば、昨日何だかうちの向かいでがやがや入って

きていた人じゃないか。取り合えず岸本のところに背負っていったら、大丈夫だから長屋へ連れて帰れって言われてね。」

というと、男はにやりと笑いながら、とんとんと拳で自分の右肩を叩いた。

「いや、これは申し訳ない」

礼を、とすぐさま体を起こそうと頭を上げれば、またも頭痛が遮った。

喜市は片手でそれをいなし、今度は柔らかく笑うと、壁ぎわに腰を下ろして壁に寄りかかった。

そして懷から細長い朱塗りの煙管を取り出すと、ひょいと清次郎に振って示し

「大丈夫かい。」

と聞いた。

痛む頭で清次郎が緩くうなづけば、返して喜市も軽く二三度うなづき煙管に葉を詰める。

清次郎は別段煙草の煙が苦手なわけではなかったが、自分を氣遣って微かに隙間風の流れる風下に行った喜市の心遣いに感謝した。

以降、喜市は特段何をするわけでもなく、ただ部屋の中にいた。鉄瓶の湯が沸くと、茶を勧められた以外は、話もしなかった。

が、清次郎はそんな初めて会う男との氣まずさは微塵も感じず、返って穏やかな時間が心地よくもあった。

その七

喜市は日が暮れると、火鉢やらを残したまま自分の長屋へと戻っていった。其の頃になると、清次郎の具合もすっかり良くなっていたのは、不思議なものであった。

自分を氣遣つてくれている家族よりも、何気なく傍にいてくれる見知らぬ男の方が気が休まるとは何とも不思議だと思つと、清次郎に力ない笑いが沸いた。

それから喜市はことあるごとに清次郎の世話をしてくれた。

ここのそばは不味いとか、煮しめならあすこのほうが旨いとか、そんな取るに足らないことから、口入屋から聞き入れた用心棒の用立てをそれとなく流してくれたりもした。

寝てるんなら手伝え、と長屋の住人の花見にも駆り出されたが、お陰で清次郎は長屋の皆と親しくなつたし、行きつけの蕎麦屋のばあ様に可愛がられたりするようにもなつた。

そんなおちおち寝ていられない生活の中で、清次郎はいつの間にか頻繁に起きていた自分の眩暈のなくなっていることに気づいた。

しかし相変わらず匂いは分からない。

正直そんなものだから、味もよく分かりはしないのだが、喜市がいそいそ連れて行ってくれる飯屋で自分が食うのを満足そうに見て笑う喜市を前にすると、不思議と美味しいような氣もした。

「しかし、武家つてのも窮屈なんだねえ。毎日一人で飯を食つて旨いものか。毎日一所懸命に働いてたのに、思いやりつてもんがないのかい。」

喜市は、共に食べるもがいると旨く感じるな、と言う清次郎の身の上を知つてこう言つたが、武家では男子が一人で飯を食うなど特段

珍しいことではなかったので、清次郎にはこの言葉のほうが意外であつた。

それは今まで感じたことのない類の「思いやり」なのだ、と分かつた。自分が喜市や長屋の住人と過ごす時に感じる心地よさはそれなのだ。

故郷の家族も、江戸の家族も、自分に気遣いはしてくれていた。配慮してくれてはいた。

しかし、今自分の周りにいる人間のそれは、明らかに違うように思う。

隣の老夫婦は、自分に古い火鉢を譲ってくれた。清次郎が喜んで礼を述べると

「そんなに喜んでもらえて嬉しいね。これからは少しあつたかろうね。」

と笑顔で口にした。

この夫婦だけではなく、他の住人も色々と世話を焼いてくれ、清次郎が屈託なく喜ぶと、照れながらも嬉しそうな顔をしていた。

岸本のところへ行く途中、迷つて世話になつて以来親しくしている住職は、清次郎が齒ごたえが良い沢庵をもりもりと食べ、旨いと褒めるとそれを食いきれぬほどに喜んでもたせた。

清次郎自身、それを上手く表現することは難しかったが、彼らのする思いやりとは、向かい合つて食う飯のようだと思つた。

「清次郎、開けるぞ」

言うより早く、侘助が戸をぱしんと引いた。後ろでは喜市が拳骨に

した手の甲を、侘助の頭に落とすと

「清次郎殿、だろう。」

と叱った。頭を両手で押さえる侘助が、恨めしいそうな目つきで見上げると、べえ、と舌を出した。

「おい、侘助しつぽ」

突然あがった喜市の声に、侘助は思わず頭にあつた両手をそのまま尻に当てる。

すると喜市は

「しつぽくでも食いに行くかい」

と、意地の悪い笑みをたたえて侘助にたずねた。

侘助は立て続けの仕業に眉間の皺を深くすると、かかとを後ろに蹴り上げて喜市の脛を蹴った。突然の痛みに、喜市は顔を引きつらせ言葉を失っている。

其の様のおかしさに、清次郎はこらえきれず大いに噴き出した。侘助はげらげらと笑う清次郎の膝にひよこと乗つかる。

「隣のばあさまが花見に付き合えだ。清次郎も行くぞ。」

と、足を上下にぶらぶらと揺らして遊びながら言う侘助は、土間の隅に何かを見つけるとひょいと飛び降り、かまどの脇のいくつものかめの中から沢庵や糠漬を取り出し

「これを土産に持っていくぞ」

と二本ほどつかむと外に行ってしまった。おそらく喜市の隣に住むばあ様のところへ持っていたのだろう。

「あいつめ、あんなにしつかりつかんだら後で臭いじゃないか」

苦々しい顔をして呆れるものの、喜市はまるで弟にでも言うように

「侘助、糠は洗って落として来い。お前の手もしつかと洗えよ。」

と戸の外に顔を出して声をかけた。

辺りには既に侘助の持ち出した沢庵の匂いが一杯に漂っていて、こ

らえきれず清次郎は思わず後ろの小さな引き戸を開けた。

途端に抜ける風においは直ぐに一層され、代わりに暖められた春の土の香りが部屋に入り込む。

「ああ」

喜市は何かを思いついたようにいつもより緩くなっている着物の懷を探ると、細長いものを取り出した。

「清次郎殿、最後の一枝、あなたにあげるよ。」

そう言つて差し出した手には、三つばかりの花がついた梅の枝があった。

「まだ花が咲く前に、子供らが風ぶつけて折っちまつてね。うちで水をやつてたらやつとで咲いたのさ。お初ちゃんなんか、匂い嗅ぎすぎて鼻の頭に黄色いのつけてたよ」

思い出し笑いをする喜市から、まだ初々しく張りのある枝を受け取ると、自然と鼻を近づけて大きく息を吸った。

其の瞬間、清次郎の頭には、郷里の凍てつくような月と、それに照らされた恐ろしく白い梅の花の景色が駆け抜けた。春と言うにはとても足りないあの冷たい風が、肌をなでたような気がした。

気づけば、頬の上をほろりと一つ、涙が尾を残して流れている。

目の当たりにした喜市は咄嗟に畳の上に膝で乗り上げ、少し狼狽して、どうした、と尋ねたが、清次郎は言葉なく首を振ると、少しくつむき言葉をなくす。

すると少ししてやっと一言

「誠に良い香りだ。」

と、涙も拭かずに口にした。

清次郎の穏やかで清しい顔に、一瞬喜市は気を取られたが、直ぐに我に帰ると真剣な顔をして清次郎に問いかけた。不意に沸いた期

待のせいで、問いかけたと言うよりは、問い詰めるような口調になった。

「清次郎殿、梅の香がわかるのか」

清次郎は梅の枝を持たぬもう一方の手で漸く涙をぬぐうと

「ああ。でも、最初に分かったのは漬物の匂いだが。」
と言って、笑った。

驚きで直ぐには言葉が告げなかった喜市であつたが、鼻の奥それを打ち切つて笑いが一度噴出すと、止められずにけらけらと笑い声を上げた。

「其の方が、長屋暮らしっぽくていいじゃあないか。漸く板についてきたんだな」

からかつて口にするものの、その顔には安堵が満ち満ちて見えた。

「ようし、それでは花見に参ろうぞ。」

喜市はわざとらしい役者口調で言うと、井戸の方へと去つていった。おそらく侘助の手伝いにも行つたのだろう。

あと、半刻程もすれば、肴を囲んで皆でやかましく花見をしているはずだと思ひ浮かべると、清次郎は自然と頬がゆるんだ。

故郷では今頃、梅の花がその盛りを迎えているだろう。

手の中で咲いている咲き遅れた梅が、その風景を懐かしく思い起こさせたが、しかし清次郎の直ぐ傍で漂う花の香には程遠い其の長屋の香りが、今の自分には愛おしく思えた。

花見を終えたら、久方ぶりに手紙でも書こう。

忘れえぬ郷里の家族と、江戸の家族へ、梅の花を一つずつ添えて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6441k/>

匂いおこすは梅の花・

2010年10月21日15時11分発行